

2021年12月12日（日）「首尾一貫した自由への道」

ガラテヤ 2:11-14

11 ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、責めるべきところがあったので、私は面と向かって非難しました。12 というのも、ケファは、ヤコブから遣わされた人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼を受けている者たちを恐れ、異邦人から次第に身を引き、離れて行ったからです。13 そして、ほかのユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。14 彼らが福音の真理に従ってまっすぐ歩いていないのを見て、私は皆の前でケファに言いました。「あなたは自分がユダヤ人でありながら、ユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活しているのに、どうして異邦人にユダヤ人のようになることを強いるのですか。」

【序論】

「生き方における首尾一貫性」は、人との関係を構築する上で極めて重要な側面であります。言動と行動との間に矛盾があると、人から信用してもらうことができません。もしこの世に「虚偽」というものが存在しなかったとしたら、どのような社会になっているのでしょうか。実際この世は、多くの嘘で塗り固められています。福音は人の生き方に首尾一貫性をもたらすものです。なぜなら、福音の源、福音そのものであるイエス・キリストの内には矛盾が一つもないからです。よって、この方を内に宿すことにより、私たちの生き方には一貫性が出てくるという論理になるでしょう。しかし同時に、私たちは気づかぬうちに矛盾した行動を取っていることもありますので、吟味が必要です。その矛盾は、欲望から出ることもあれば、恐れによって生じることもあります。

【本論】

今日の箇所ではパウロは、かつて経験したアンテオケ教会でのペテロとの衝突を回想しています。この衝突は、ペテロがエルサレムからアンテオケに来たとき、最初のうちはアンテオケ教会の異邦人信者と一緒に食事をしていたのに、あるところからユダヤ人の目を恐れて彼らから離れていったという事件が元になっています。誰かと一緒に食事をするか否か。これはさして大きな問題ではないように思えるかもしれませんが、しかし、パウロはここに福音の真理を根底から覆す問題が潜んでいることを見抜いたのです。

本論 1. 異邦人と一緒に食事をしていたペテロ

ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、責めるべきところがあったので、私は面と向かって非難しました。(2:11)

「ケファ」とは、ペテロのアラム語読みです。ペテロはエルサレム教会の指導者でしたが、この時に何らかの目的でアンテオケ教会を訪ねて来ていたようです。2:1からの文脈で読みますと、エルサレム会議での決議事項（その中心的内容は、異邦人も等しく救いに招かれており、割礼なしに恵みにあずかれるということ）を報告に来たと捉えることができそうです。アンテオケ教会は、ユダヤ人キリスト者によって始められた教会ですが、そこから異邦人宣教へと拡大し、教会内にはユダヤ人と異邦人が混在していました。これは、私たちにはなかなか理解することができないほどの革新的な状況だったのです。本来、旧約聖書の定めでは、ユダヤ人は異邦人と交わってはならず、食事を一緒にすることが固く禁じられていました。それは、異邦人が「罪人」と見なされていたからです。これは元々、イスラエルを聖なる民とし、異教から分離するという目的で与えられた戒めでしたが、やがて一種の「差別」となってユダヤ人の民族意識の中に深く根づいていきました。長い年月を経て形成された価値観を覆すのが容易ではないことは、歴史が証明しているでしょう。

しかし、パウロはこのアンテオケ教会で、ユダヤ人と異邦人の共同の食事をスタートしたのです。これがどれほど勇気の要ることであるか、読者はよく理解しなくてはなりません。パウロの中で、自分が古い価値観を持つユダヤ人たちの攻撃的になることは容易に想像できたでしょう。ユダヤ人全般にとって、これがどんなに受け入れ難い状況であるか、彼はよく分かっていたのです。しかし、その「常識」が覆される時代が到来していた。主イエスの十字架によって、「隔ての壁」が取り払われたからです。パウロは命がけで、この新しい時代を切り拓いていかななくてはなりません。差別の時代は終わった。異邦人も自由に神の許へ来られるようになったのだ。ユダヤ人と異邦人が共に食事をすることで、福音の自由を証しするのだ！

ペテロがアンテオケ教会に初めて足を踏み入れたとき、一体どういう感覚を覚えたでしょう。これは想像するほかはありませんが、かつて経験したことのない「違和感」を覚えたと思われます。彼が「キリスト者」として生きてきた場所はエルサレム教会であって、そこはユダヤ人ばかりで構成されており、「ユダヤ教の延長としてのキリスト教」という、ある意味でスムーズな移行がなされたと思われます。つまり、ユダヤ人としてキリスト者になる場合、もう生まれつき割礼は受けているし旧約律法を心に持っておりますので、それらを捨てる必要もなく、解釈を変えれば良かったのです。これは、

「楽な移行」であると同時に、根本的な落とし穴ともなりうる状況でした。旧約的な価値観が覆され、真新しい価値観がここに始まっているという感覚を持ちづらかったと思われま。彼らは今まで生きてきたユダヤ人としてのアイデンティティはそのままに、イエスをメシヤとして受け入れればそれでよかったです。よって、キリスト者となることにより更に律法を忠実に愛するようになった人が多かったと思われま。

それに対し、パウロの回心は全く別物でした。彼は律法を愛するあまりにキリストを迫害してしまったという経緯がありましたから、「律法遵守」というユダヤ教徒としての道そのものを捨てたのです。そして、彼だからこそ異邦人に伝道ができたのであります。その意味で、アンテオケ教会には、見たこともないほどの自由な雰囲気は漂っていた。ユダヤ人と異邦人が食卓を共に囲んで笑い合っているのです。この革新的な状況に直面したペテロは、当初は躊躇いながら、苦笑いをしながら、勧められるままに食卓に就いたことでしょう。とはいえ、彼が異邦人との食事の意義を全く理解していなかったということではありません。使徒 10 章で、彼はローマ人コルネリオの回心に立ち会っており、それに先立って、夢幻の中で神様から「これまでに禁じられてきたものを食べなさい」と勧められた経緯があるからです（使徒 10:9-16）。頭では主の御心を理解しつつあった。しかし、実際に異邦人と共に食事をするとした場合、落ち着かない気持ちで席に着いたと想像します。それでもだんだんと慣れてきて、パウロやバルナバがやっているように彼も交わりの輪に馴染んできていました。

本論 2. 異邦人との食事を拒絶したペテロ

ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、責めるべきところがあったので、私は面と向かって非難しました。というのも、ケファは、ヤコブから遣わされた人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼を受けている者たちを恐れ、異邦人から次第に身を引き、離れて行ったからです。（2:11-12）

さて、ペテロが少しずつ異邦人との交わりの輪に馴染んできていたところに、エルサレム教会からの使者がやって来ました。彼らは「ヤコブから遣わされた人々」と言われていますが、ヤコブとは主イエスの弟に当たり、当時エルサレム教会の内政を司っていた人物です。彼はこの教会の中でも特に「ユダヤ色」が強く、「ユダヤ教徒の延長としてのキリスト者」の模範でした。キリスト者となることによって、より忠実に律法に生きるようになっていたのです。そして、教会員たちからもその意味で尊敬されていました。彼から派遣されたということは、この人々も「ヤコブ的」であり、相変わらず律法を重んじる立場にあったと思われま。その人々が到着したとき、ペテロの態度に異変が生

じました。彼は異邦人との食事の席を離れ、ユダヤ人たちと食事をするようになったのです。私が想像するところ、彼はエルサレム教会の使者が来たのを理由にそそくさと立ち上がり、なに食わぬ顔でユダヤ人の輪の中に入って行ったと思われます。このユダヤ人たちにとって、異邦人と食事をしないことは当たり前でしたから、彼らのための席を設けてくれるよう要求したかもしれしれません。そこにペテロはすごすごと場所移動をしたのです。どこか後ろめたさを感じているペテロの丸い背中が目に浮かぶようです。

この時のペテロの心境は複雑でした。アンテオケ教会に来てからの日々、彼はパウロの理念を聞くことにより、異邦人との食事の意義を理解し受け入れられるようになってきていました。しかし、ことエルサレム教会からの使者を前にしたとき、彼の中の本能は「ユダヤ人キリスト者をつまずかせてはまずい」という警鐘を鳴らし始めたことでしょう。心臓は激しく鼓動を打ち、彼には判断が求められました。ペテロはエルサレム教会のトップでありましたから、彼がどう振る舞うかは周囲の信徒たちに多大な影響を及ぼすこと必至でした。そこで彼は、異邦人と一緒に食事をしている姿を見られるというリスクを回避し、ユダヤ人の輪に入る（元サヤに収まる）ことによって、事なきを得ようとしたのです。

ところが、この一貫性のない態度を見たパウロは、「これはとんでもないことが起きている」と気づきました。ペテロこそ、この新しい交わりを、やって来た他のユダヤ人たちにも伝えるべき立場にあるのではないか。それなのに、彼はユダヤ人を恐れて異邦人から離れてしまった。これは、再び異邦人との交わりを拒否することであり、ユダヤ人はユダヤ教に戻り、異邦人は救いの恵みから除外されるという意味がもたらされてしまう。パウロはこの状況の背後に隠された重大な真理に気づいたのです。そればかりか、状況は更に悪くなってきていました。

そして、ほかのユダヤ人も、ケファと一緒にこのような心にもないことを行い、バルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。(2:13)

アンテオケ教会のユダヤ人信徒たちは、ペテロに引きずられるようにして、「ユダヤ人席」に移って行ってしまった。その中には、先にエルサレム会議に一緒に行って「異邦人に無条件にもたらされる救い」と理解してもらうことで心を合わせたバルナバまでいたというのです。ユダヤ人の中で異邦人側に残されたのはパウロただ一人でした。異邦人席にいる人々の悲しそうな眼差しがパウロに注がれる。パウロはこの状況を黙認するわけにはいきませんでした。彼は、主イエスが打ち砕いてくださった「隔ての壁」が再びニョキニョキと背を伸ばし始めているのを見たのです。そこで彼は、敢えてその場の空気を読むこともなく、ペテロに向かって声を大にして叫びました。本来、この叫びはユダヤ人席へと移って行ったアンテオケ教会のユダヤ人キリスト者全員に向けられる

べきところでしょう。しかし、パウロはペテロを代表として、その問題を指摘したのです。

彼らが福音の真理に従ってまっすぐ歩いていないのを見て、私は皆の前でケファに言いました。「あなたは自分がユダヤ人でありながら、ユダヤ人のように生活しないで、異邦人のように生活しているのに、どうして異邦人にユダヤ人のようになることを強いるのですか。」(2:14)

ここでは複雑なことが言われているようにも聞こえますが、パウロの論理は明快です。ペテロにとって「異邦人のように生活している」とは何を意味するかというと、まず誤解のないように申し上げなくてはなりません、それはアンテオケ教会で異邦人と一緒に食事をしたという行為そのものを指しているわけではありません。むしろ、彼が「律法の行ないなしに人は救われる」という信仰の最も基本の部分を受け入れていることを意味します。パウロにとって、異邦人と食事を共にするとは、この理念の証そのものでした。しかし、この交わりを捨ててユダヤ人とだけ交わろうとするところには、理念の放棄があると彼は言っているのです。生き方に首尾一貫性がない。ペテロが実際に異邦人に対して割礼や律法を要求したということではありません。しかし、パウロから見て、彼の行動は本質的に「割礼の強要」「律法の強要」を意味していたのです。なぜなら、「それなしには交わりは持ちませんよ」とペテロが言っているに等しいことだったからです。ペテロにもバルナバにもそのような認識はなかったことでしょう。しかし、論理を追求するパウロは、彼らの行動が行き着く先はそこであるという事態を見抜いていたのです。

【展開】

今日の箇所における、パウロの問題提起の仕方には、牧会者としていささか疑問を感じるところがないわけではありません。会衆の面前で誰かを叱り飛ばすことは、その人の人格を傷つけてしまう可能性があり、ペテロは実際大いに恥じ入ったと思われるからです。しかも、ペテロはキリスト者としてパウロよりずっと先輩であり、もっと尊重されて然るべきだったとも言えるでしょう。しかし、パウロはそのような人間的な配慮を一切せず、その場にいるすべての人の面前でペテロと対峙しました。これは勇気の要ることです。その場の空気は凍りついたことでしょう。アンテオケ教会の異邦人たちも、パウロにそこまでのことをしてもらいたかったとは思えません。しかし、パウロはこの時、何としても声を挙げなくてはなりませんでした。真理が不明瞭であるところに、明確な提示をするという意味があったのででしょう。そこにいる全員が、この事態（ユダヤ

人と異邦人が食卓を分けること)の意味を理解しなければならなかった。それは、主イエスがもたらしてくださった新しい神の家族が分断されることであった。異邦人も割礼を受けなければ、ユダヤ人との交わりに入れなかったことを意味した。割礼を受けなければ交わりに入れなかったのであれば、救いには「人間の業」という条件が付け加えられることになる。これはすなわち、主イエスが十字架の死によってもたらしてくださった「誰でも恵みに依り頼むなら父なる神様の許へ行くことができる」という道を閉ざすことを意味した。

パウロの中では、これらのことは一本につながっていました。おそらく、この時に、パウロの真意を理解できた人はほとんどいなかったことでしょう。ペテロとパウロの関係も、バルナバとパウロの関係も悪くなった可能性さえあります。その証拠として、使徒 15:36 以下では、アンテオケ教会を拠点としてパウロとバルナバが伝道旅行に出て行くこととなりますが、両者はこの時に激しく仲違いして、結果別行動をとることになってしまうのです。この間接的な原因として、今日の箇所での衝突があったのではないかと想像します。

【結論】

ルターはこの箇所の注解において、こう言っているそうです。「このとき全福音と全教会とがパウロただ一人の肩の上にかかっていた」と。福音の真理に目が開かれていたのはパウロだけであった。そして、この問題を声を大にして明らかにできたのも彼だけでした。問題にまったく気づいていない人もいたかもしれません。あるいは、ぼんやりと気づいてはいても言語化できない人もいたかもしれません。かなりの程度理解できてはいても、口を開けなかった人もいたかもしれません。この時にはパウロに対する誤解ばかりが生じたかもしれません。パウロについて、悪い噂が立ったかもしれません。いろんな可能性を加味しながら、パウロが勇気を出して口を開いたところには、永遠的価値があったことを読者は知ることができるのです。福音に生きるということは、まことの自由を得るということである。しかし、その自由の道は細く、簡単に脇道に逸れていく危険性があります。自由の論理的な一貫性を注意深く見出しながら、同時に自分の生き方がそれにふさわしくあるかどうかを、私たちは問い続ける必要があるのです。その試金石となるものがあります。それは、聖徒の愛の交わりであり、一切の差別が撤廃された状態です。誰もが恵みによって神の御前に出ている状態、教会は常にそこを目指しているのです。

【祈り】

聖徒の交わりを実現に至らせ給う、天の父なる神様。かつて食事を共にすることのなかったユダヤ人と異邦人が、主イエスにあって一つとされました。パウロは両者の間の壁が再構築されることに断固として反対しました。私たちもその自由に生きます。差別や仲違いのあるところに、キリストの平和をもたらす者とならせてください。あなたとの間に与えられた平和を、人との関係にも実現していくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
罪の赦しをもって、人との交わりを取り戻し給うた、父なる神の愛、
ユダヤ人と異邦人の共同の食事を実現に至らせ、赦された者たちの教会を形成し給うた、
主イエス・キリストの恵み、
あらゆる差別を撤廃し、聖徒の交わりを形成させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。